

History of thoughts and citizen archives: Sustaining the quality of our social life

思想史と市民アーカイヴ: 社会的生の質を保つために

世話人: 中山智香子 (東京外国語大学)

報告者:

田中滋 (アジア太平洋資料センターPARC 事務局長、非会員)

友常勉 (東京外国語大学)

コメンテーター:

武藤一羊 (ピープルズ・プラン研究所 (PP 研) 運営委員、非会員)

ラウ・キン・チー (嶺南大学文化研究准教授、嶺南大学文化研究発展センター持続可能な文化プログラム・コーディネーター、中国・香港、非会員)

マイケル・ハート (デューク大学、非会員)

本セッションは、PARC (Pacific Asia Resource Center アジア太平洋資料センター) のデジタル・アーカイヴ、特にそこに収録された英文雑誌 AMPO について、アカデミアと NPO メンバーとの協働でその意味を深めるセッションであった (以下、敬称略)。

昨年、創立 50 周年を機に所蔵資料のデジタル・アーカイヴを公開した PARC は、武藤一羊らが始めた民衆的活動の団体であり、ベトナム戦争反対・平和を軸にアジア太平洋の人びとと連帯し、内発的発展、持続可能な発展の思想や実践を牽引してきた。本セッションでは PARC の現事務局長の田中滋、社会運動論に造詣の深い友常勉会員が報告を行い、コメンテーターに PARC 創設者の武藤一羊、かれの活動の長年の協働者で武藤に関する研究実績もつらオ・キンチー、1970 年代の市民運動に関する著書を近年刊行したマイケル・ハートをオンラインに迎えて、ハイブリッド形式、英語で議論を行った。

世話人による短い主旨説明と登壇者紹介の後、田中が PARC の簡単な紹介とデジタル・アーカイヴ作成の経緯、アーカイヴの概略説明を行った。PARC の現在まで続く重要な視点として田中が参照し言及したのは、1989 年に英語と日本語で出された水俣宣言 (Minamata Declaration) である (会場参加者に向けては、日英全文のコピーを配布し、オンライン参加者にもチャットで送付した)。

続いて友常は AMPO の 5 つの特質を取り上げた。第一に人びとの連帯をベースとしてラディカル左派を結び付けた想像的連帯がある。PARC はベ平連と関わって生まれた運動であり、国際的解放闘争に強く方向づけられ、やがて第三世界との連帯に至った。第二に AMPO がラディカル左派運動の検証を試み、連合赤軍の内紛を考察した点があり、1972 年の論考「イカロスの失墜」に示されている。第三に AMPO はポスト・ベ平連としての準備を行ったとして、小田実のインタビュー記事の「世直し」的側面に着目した。第四にアジアの人びととの連帯があり、第五には同時代の資本主義に対する批判的な分析がある。後者については 1977 年の自由貿易圏 (FTZ) に関する論考への言及がなされた。

これらの報告を受けて武藤はまず、AMPO の創刊が 1969 年であり、運動体にも社会全般にも 1970 年以降への準備を整えた年であったと強調した。次に創刊された AMPO の副題が「Report from the Japanese New Left (日本の新左翼からの報告)」(1969) から「Report from the Japanese people's movement (日本の人びとの運動からの報告)」(1972 年)、「Japan-Asia Quarterly Review (日本とアジアの四半期雑誌)」(1974 年) へと推移したことを軸に、運動の狙いや当時の思想的特質の変遷を説明した。第一期の新左翼については近年研究されつつあるが、異なる動機から出発した数々の運動の間にある種の精神や姿勢などが共有され、共通のゾーンが形成されたという。それは上から押し付けられるものへの拒絶でありつつ、献身や勇気への敬意を含んでいた。次に 1972 年の副題の変更は、赤軍派の悲劇的な事件を機に、草の根の運動としての方向性に舵を切ったことに対応していた。その後欧米、アジア諸国の運動体との交流が増大し、1974 年には ANPO の国際的メディアとしての役割が定着したため、副題変更となったとした。

キンチーは武藤を「運動の思想家兼組織者」と位置づけた上で、AMPO が求めた活動主体としての「人びと」について論じた。それは旧左派の共産党とは一線を画しつつ前衛的力や市民とも異なる、「草の根」を標榜する概念であり、既成の主権ではなく複雑なネットワークを含むトランス・ボーダーな主体である。キンチーはこの概念が、ハートの提示したマルチチュードの概念に近いのではと問いかけた。また彼女はこの「ピープルネス」が 1960 年代から発展して、戦争や搾取、資本主義の圧力に抗する組織原理となり、1989 年の「ピープルズ・プラン 21 (PP21)」に結実したとする。これは田中報告で言及された水俣宣言を起点とする活動主体である。水俣宣言の視点はバンコクやカトマンズでの国際集会へと連なり、国境を越えた「ピープルネス」の活動として具体的に展開されていった。さらにキンチーは武藤の示した「名づけ」の意味、AMPO を含むこのようなアーカイヴの意義について短く整理した後に、現在のガザの状況にも言及してコメントを締め括った。

ハートは AMPO の存在を今回知ったとのことで、その意義を三点に分けてコメントした。第一に武藤の論じたニューレフト運動としての側面、特にノン・セクト的かつオープンで批判的なスタンスの重要性を、赤軍派の問題への批判的視点などを評価しながら論じた。第二に当時のこの運動が、独自の希望 (aspirations)、解放への希望を持っていたことの意味を指摘した。それはとりわけ、このような希望が降格されている現代において、重要性を持つとした。第三に論じたのは、AMPO がもっていた下からの非国家的な形態のインターナショナルイズムの意義である。ハートは現代の状況を、経済が多面的かつ前面にせり出したグローバルな戦争体制と位置づけ、これに抗う非国家的な形態のインターナショナルイズムの果たす役割を大としたのである。セッション当日はアメリカ大統領選から数日後で、アメリカの悲観的状況を認めつつも、だからこそ希望が重要であると締め括った。

その後、登壇者間、また参加者との議論を行った。オンライン参加者は 19 名、対面参加者は 6 名であったが、セッション後にも対面参加者からのコメントや議論が続き、充実したセッションであった。